



強くて品格のある 企業を目指して

～ 見えないものの大切さ ～

中部電力株式会社
取締役 技術開発本部長 田中 孝明

科学技術立国を旨とするわが国にとって、21世紀の国際競争社会の中で日本企業が生き残り、そして勝ち抜いていくには、「人と技術」が必要不可欠です。

ところが、ここ数年をみても、会社をめぐる世界では、効率性や収益性、生産性、さらには成果主義の導入など、短期的で「目にみえる数字」にばかり焦点をあてた企業経営がもてはやされてきました。最近になって、ようやく人財の質や技術開発力、企業文化など見えない資産の大切さが見直されつつあります。

この世では、見えるものより見えないものの方がはるかに多く存在します。その典型が「人と技術」です。私が現在直接かかわっている、技術開発の仕事は、未知のものを研究、開発するといういわば「見えないものへの挑戦」です。

一方、人についていえば「人への投資」は財務諸表には、人件費、教育研修費、訓練費などの項目として表れるのみで、「使命感」「倫理感」「モチベーション」などは数値には表われず目にはみえません。

しかも「世のため、人のためにお役に立つという使命感」が企業にとっても、社員にとっても極めて重要なものであり、また、そういった使命感を持った社員こそが、まさに「会社の最高の財産」であると、私は常々考えています。

このような視点からみると、企業に必要な「人財と技術開発力」は、今風にいえば「見える化」が困難なのです。「企業は人なり」といいながら、目先のコストダウン、リストラを優先し、「人」への投資や人財育成を怠り、ここへ来て、「人財不足」「技術継承」に課題を抱えている会社も多くあります。

この世には「見えるもの」の方が少ないにもかかわらず、ややもすると、そのわずかな「目に見えるもの」だけから、大事な判断、決断をしていることが多いように思えてなりません。企業の持続的な成長には、長期的な視点に立った考え方が欠かせないはずで

その意味で、人財育成ほど長期的な投資はありません。10年、20年先をみた将来への投資で、実を結ぶまでには時間もお金もかかりますが、長い目でみれば必ずそれなりに大きな財産（人財）になって返ってきます。

私が過去に出会って、大切にしているものの一つに、次の荘子の言葉があります。

りょうじゅさいこん
「良樹細根」

この4文字には、私たちの仕事や日頃の行動において学ぶべき点が多く隠されていると思います。人はどうしても目に見える部分に気を取られ、またそれを追い求めがちですが

本当に大切なのは目に見えない部分ではないでしょうか。人でも企業でも、質の良いものは、必ず、地中に細かな根をしっかりと張っています。最も大切なのは毛細血管にも似た細い細い根であり、それがしっかりと大地の栄養を吸い上げて地上の大きな幹に送り込んでいるのです。どんな雄大さを誇る良樹もこの細根なしには存在し得ません。

陽のあたらないところで地道にこつこつとがんばり続けている「細根」に思いを馳せるとき、まさに見えないところで、使命感を持ってひたむきに働いている多くの社員が重なるように見えてきます。

一人ひとりが与えられた立場で小さな努力を積み重ね、各職場を築き、それらが会社を根底から支えて社会のお役に立っている、このような強い使命感を有した「見えない細根」に満ち満ちている企業こそが、私が思い描く「強くて品格のある」企業なのです。